

三 股 町 教 育 研 究 所

I	主題・副題	7 - 1
II	主題設定の理由	7 - 1
III	研究目標	7 - 2
IV	研究内容と年次計画	7 - 2
V	全体構想	7 - 3
VI	研究組織	7 - 3
VII	研究内容	
1	「文教みまた」の教育Q & Aの作成	7 - 4
2	小中一貫教育の現状の把握（第1回アンケート調査）	7 - 4
3	「文教みまた」の基本的な行動様式の作成	7 - 6
4	指導用DVDの作成	7 - 6
5	指導法の工夫改善（ソーシャルスキル教育の授業実践）	7 - 7
6	本年度の取組についての実態把握（第2回アンケート調査） ..	7 - 8
VIII	成果と課題	7 - 10

参考文献

研究同人

I 主題・副題

三股の特性を生かした小中一貫教育の研究
～ 学校と家庭・地域社会が連携した「あいさつ」「清掃」「郷土学習」の在り方 ～

II 主題設定の理由

○ 社会の動向と教育の今日的な課題から

日本は戦後、飛躍的な経済復興を遂げ、豊かな生活を築いてきた。私たちはその恩恵にあずかる一方で、見過ごしてきたものや失ったものも多い。その結果、近年、様々な問題が生じている。

たとえば、青少年に関わる特異な事件の増加、急激な経済変動等による生活不安、価値観の多様化がもたらすモラルの低下、戦前の古き良き慣習の喪失などである。これらの問題に関わるものとして、情報の氾濫、家庭や地域の教育機能の低下、社会・自然体験の不足、仮想世界や娯楽志向が生み出す現実世界とのギャップなどが挙げられるであろう。

学校と家庭と地域社会は、力を合わせながらそれぞれの教育機能を発揮して、夢や希望をもってよりよく生きる子どもを育てることが求められている。

○ 地域の特性と実態から

三股町の位置は宮崎県の南西部で、都城市と隣接しており、人や物、文化の交流などが盛んに行われている。近隣の市町村の人口が減少している中で、本町の人口は増加傾向にある。

本町は歴史的にも古い。約 140 年前に薩摩藩士の三島通庸が町の基礎を築き、教育振興に尽くしたため、「文教の町」と言われている。また、棒踊り、奴踊りなど多くの伝統芸能が残っており、保存会の人々によって子どもたちに伝承されている。

町内には小学校が 6 校、中学校が 1 校ある。児童は 1 つの中学校へと進学するため、小中合同の研修会を通して小中一貫教育を進めやすい環境にある。

児童生徒は一般に素直で、いろいろな活動に意欲的に取り組む。しかし、あいさつや清掃など、他の人との関わりや、集団や社会との関わりについての実践力は必ずしも十分育っているとは言えない。いわゆる「中 1 ギャップ」としての課題もいくつか挙げられる。

学校と家庭との連携に関しては、PTA 活動や学級懇談会などで望ましい人間関係づくりや住みよい環境づくりにふれることはあるが、何がどう大切で、学校と家庭がどう連携すれば良いかについて、具体的に話し合うまでにはなかなか至らない。

○ 研究所が小中一貫教育に取り組むようになった経緯

当研究所は平成 17 年度から 3 年間、小中連携を大切にした学力向上の工夫・改善について研究してきた。その成果として、「学力向上を目指す学習指導で大切なこと」を明らかにして学習指導の手引きを作成した。今後の課題として、基本的な行動様式や生活習慣など学習指導以外にも小中連携を広げること、家庭や地域社会との連携を密にすること、小中連携から小中一貫教育に向けた教育活動を究明することなどが挙げられた。

折しも、三股町は、平成 19 年度より県の「地域の特性を生かした多様な一貫教育研究事業」の地域に指定された。これは、前述したように当研究所の研究方向と合致しており、平成 20 年度から町一貫教育研究組織と連携して小中一貫教育に取り組むことにした。

三股町の特性としては次の 2 つが挙げられる。

- 文教の町「文教みまた」という歴史と伝統があること
- 小学校 6 校が中学校 1 校に入学するという教育的な環境にあること

この特性を最大限に生かすために、当研究所では、平成20年度から3年間、上記の研究主題・副題を設定して研究することにした。

具体的には、小中一貫して取り組む共通実践5項目を設定した。そして、3のつく日を「みまたの日」と定め、5項目の実践について各学校で確認するようにした。

共通実践5項目	
○	登校・下校時の校門での一礼
○	授業開始時の黙想・座礼
○	児童生徒による「あいさつ運動」
○	清掃のきまりによる無言清掃
○	「みまたの日」の郷土に関する校内放送

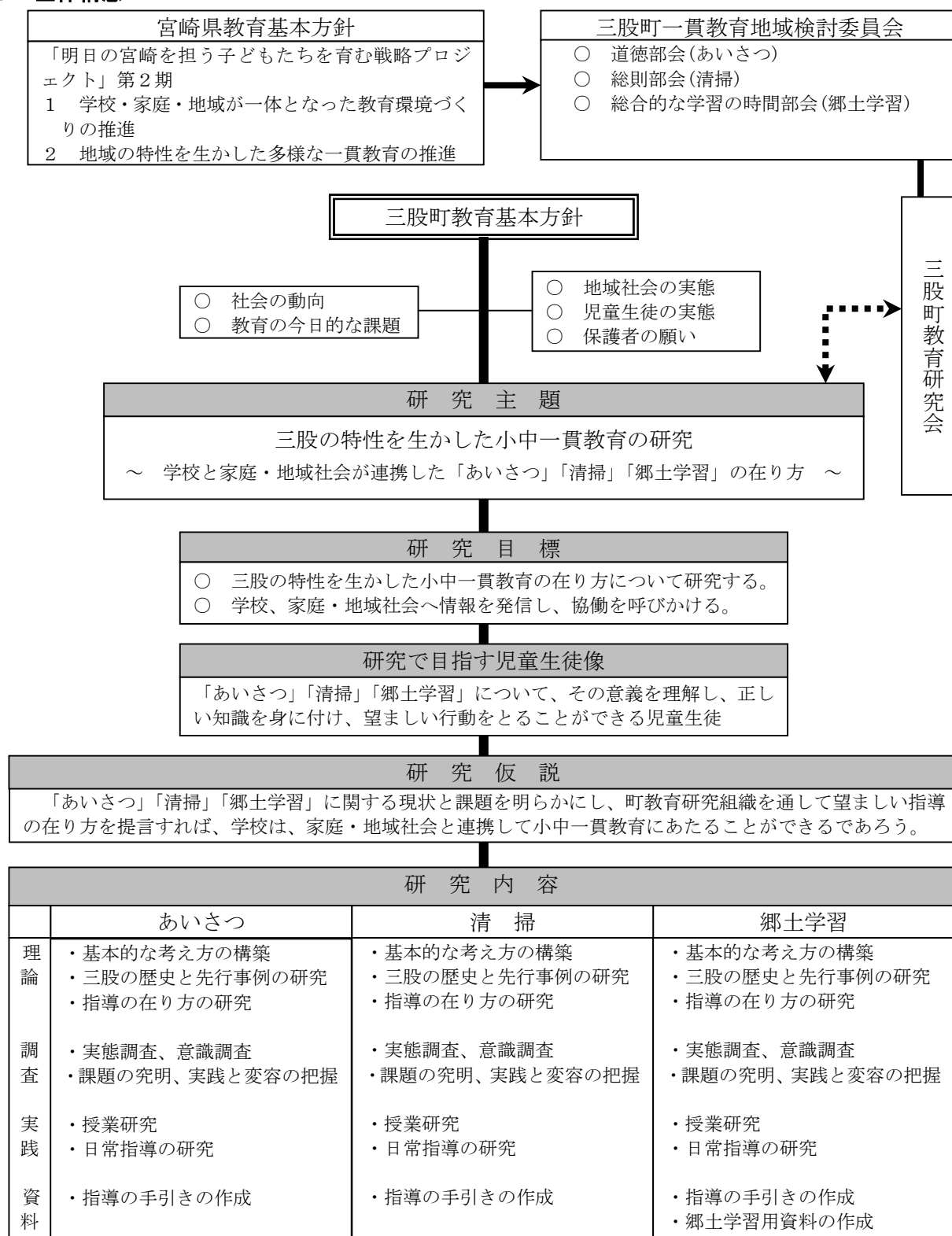
Ⅲ 研究目標

- 三股の特性を生かした小中一貫教育の在り方について研究する。
- 学校、家庭、地域社会へ情報を発信し、協働を呼びかける。

Ⅳ 研究内容と年次計画

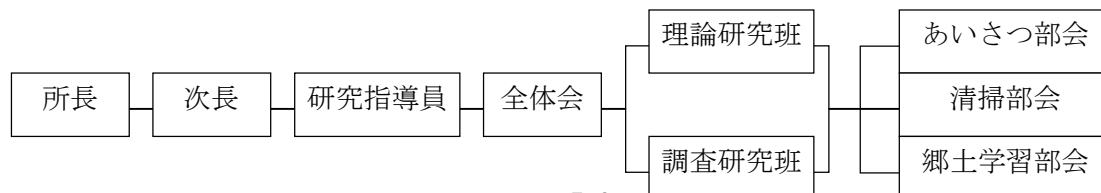
		平成20年度	平成21年度	平成22年度
あいさつ	理論	・ 基本的な考え方 ・ 学習指導要領との関連 ・ 9年間のゴールの設定 ・ 事例の研究	・ 基本的な考え方 ・ 先行事例の研究 ・ 指導の在り方の研究	・ 伝統教育としての指導
	調査	・ 実態調査、意識調査 ・ 一貫指導で大切なこと	・ 実態調査、意識調査 ・ 課題の究明、実践と変容の把握	・ 実態調査、意識調査
	実践		・ 授業研究（ソーシャルスキル） ・ 日常指導の在り方	・ 授業研究 ・ 家庭・地域での指導の在り方
	資料		・ 「文教みまた」の教育Q&Aの作成 ・ 「文教みまた」の基本的な行動様式の作成 ・ 指導用DVDの作成	・ 家庭や地域に向けた資料作成 ・ 公民館等の組織を生かした指導
清掃	理論	・ 基本的な考え方 ・ 学習指導要領との関連 ・ 9年間のゴールの設定 ・ 事例の研究	・ 基本的な考え方 ・ 先行事例の研究 ・ 指導の在り方の研究	・ 清掃の基本的なパターン ・ 指導の在り方
	調査	・ 実態調査、意識調査 ・ 一貫指導で大切なこと	・ 実態調査、意識調査 ・ 課題の究明、実践と変容の把握	・ 実態調査、意識調査
	実践		・ 日常指導の在り方	・ 日常指導の在り方
	資料		・ 「文教みまた」の教育Q&Aの作成 ・ 「文教みまた」の基本的な行動様式の作成	・ 指導の手引きの作成、完成 ・ 清掃に関するDVD作成
郷土学習	理論	・ 基本的な考え方 ・ 学習指導要領との関連 ・ 9年間のゴールの設定 ・ 事例の研究	・ 基本的な考え方	・ 三股の歴史や特色の研究
	調査	・ 実態調査、意識調査 ・ 一貫指導で大切なこと	・ 実態調査、意識調査 ・ 課題の究明、実践と変容の把握	・ 実態調査、意識調査
	実践		・ 給食時間の三股に関する校内放送	・ 授業研究 ・ 日常指導の在り方
	資料		・ 「文教みまた」の教育Q&Aの作成	・ 指導の手引きの完成 ・ 郷土学習用資料の作成

V 全体構想



VI 研究組織

研究所では理論研究と調査研究の2つの班で研究を進め、更に町一貫教育地域検討委員会の「あいさつ部会」「清掃部会」「郷土学習部会」に参加して町一貫教育研究組織との連携を図った。



Ⅶ 研究内容

1 「文教みまた」の教育Q&Aの作成

昨年度の研究やこれまでの各学校の実践の様子を振り返ってみた結果、三股町がなぜ「あいさつ」「清掃」「郷土学習」を小中一貫して取り組むのか、その意義や目的が、指導する側の教職員にまだ十分に伝わっていないという反省が出された。そこで、これまでの経過や昨年度の研究を見直ししながら、指導者向けリーフレット『『文教みまた』の教育Q&A』（A4版表裏印刷4ページ）を作成した（資料1）。このリーフレットには、昨年度から小中一貫して取り組んでいる「共通実践5項目」について、具体的にその意義を明らかにして、町内全教職員の共通理解が得られるようにした。また、このリーフレットは、各学校でいつでも活用できるように町内全教職員に配布した。

「文教みまた」の教育Q&A

三股町は、平成19年度から県の「地域の特性を生かした多様な一貫教育研究事業」の指定を受け、三股ならではの小中一貫教育に取り組んでいます。三股町は、町内6校の小学校卒業後は1つの中学校に進学すること、そして、「文教の町」として歴史と伝統があることの2つの特性があります。そこで、その特性を生かすべく、「あいさつ」「清掃」「郷土学習」の3点に絞って、学校・家庭・地域との連携を大切にしながら一貫教育を進めています。

Q なぜ「あいさつ」に取り組むのですか？

A 「文教みまた」の基礎をつくり、郷中教育に力を注いだ三島通庸（明治初期の地頭）は礼儀を特に重んじました。明治35年に創設された文武両道の心身研鑽の場「龍雲館」でも、「礼儀を正しくせよ」と館精神4ヶ条の第1条に挙げられていたように、三股では伝統的に礼儀作法を大切にしてきました。

それは、礼儀作法が、相手を尊重する気持ちや感謝の気持ちなどを心と体で表現するもので、いつの時代でも、社会生活をするうえで身に付けるべき大切な行動様式だからです。

礼儀作法の中でも、「あいさつ」は、「あなたに会えてうれしい」「あなたに感謝しています」などの気持ち

資料 1

2 小中一貫教育の現状の把握（第1回アンケート調査）

（1）調査の方法

研究を進めるにあたり、現時点での小中一貫教育の現状について調査を行い、実態を把握することにした。調査は6月の下旬、全小・中学校の全学級、全教職員を対象に実施した。保護者については学校・学年のバランスに配慮して抽出した。

（2）調査の結果と考察

小中一貫教育を進めるにあたり、町内の小中学校7校で共通実践をする項目が5つ決められている。そのうち、「あいさつ」と「清掃」に関わる調査結果とその考察を述べることにする。

① 児童生徒と教職員の意識の差

図1（児童生徒）

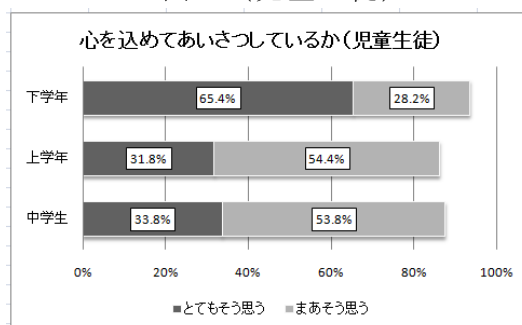


図2（児童生徒）

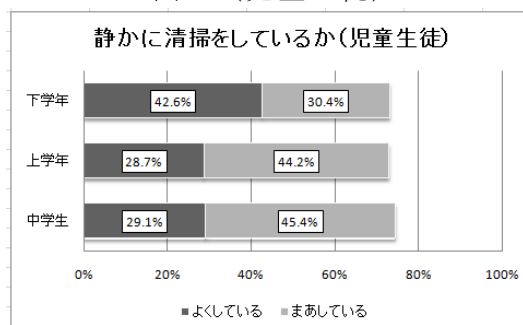


図 3（教職員）

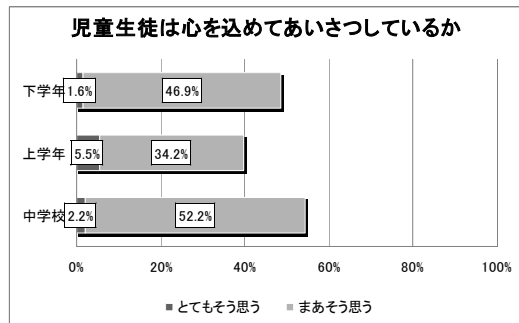


図 4（教職員）

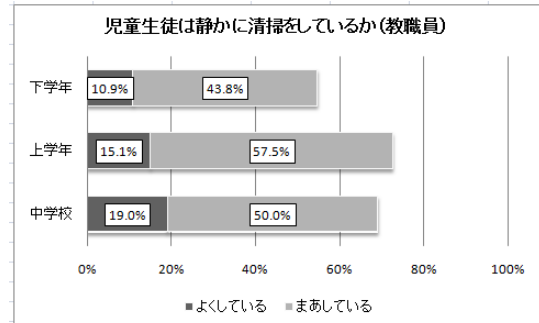


図 1 を見ると、「心をこめてあいさつをしているか」との問いに対して、ほぼ 9 割の児童生徒が「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えている。次に、図 2 を見ると、「静かに清掃をしているか」との問いに対しても、ほぼ 7 割の児童生徒が「よくしている」「まあしている」と答えている。このように、児童生徒の意識として、あいさつや清掃についての自己評価は高い傾向が見られた。

一方、教職員から見た児童生徒に対する評価の結果（図 3、4）では、「心をこめたあいさつをする」「静かに清掃をする」のどちらとも、児童生徒の自己評価に比べて低い評価である傾向が示された。このような結果から、児童生徒と教職員の間に、望ましいあいさつや清掃の仕方について意識のズレがあることが示唆された。

② 教師の指導の効果

図 5（教職員）

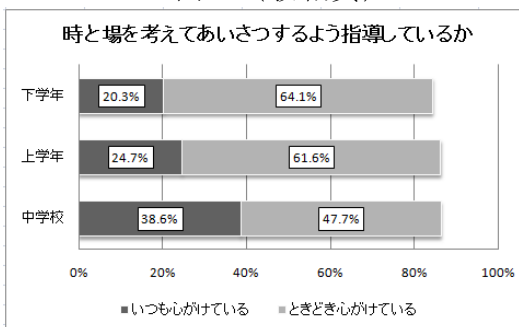


図 6（教職員）

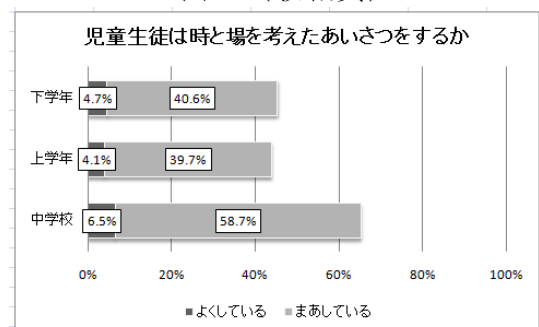


図 5 を見ると、8 割を超える教職員が「時と場を考えたあいさつをするよう指導している」と答えている。ところが、図 6 の「児童生徒は時と場を考えたあいさつをするか」では低い評価をしていることが分かる。教職員の多くは、あいさつや清掃について指導はしているものの、その効果が十分でないと感じていることがうかがえた。

この結果から、あいさつや清掃について、児童生徒の実践力を高める効果的な指導法について研究を進めていく必要があることが示唆された。

（3）調査結果からの課題について

上記の調査結果から、次の問題点が明らかになった。

ア 望ましいあいさつや清掃の仕方に関してのゴールイメージが教職員と児童生徒ではズレがある。

イ 共通実践事項について指導を行ってはいるが、児童生徒の実態は十分ではない。

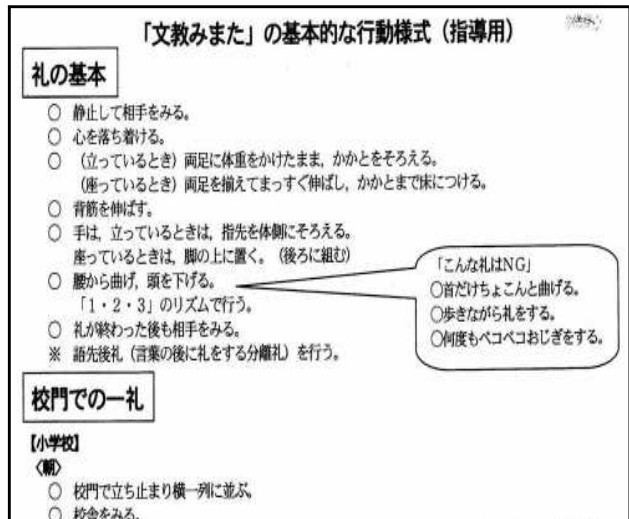
そこで、このような問題点を解決すべく、以下の 2 点を課題として設定した。

<課題 1> 望ましいあいさつや清掃の仕方に関してのゴールイメージの共有化

<課題 2> 日常指導や道徳・学級活動などの授業における指導方法の工夫改善

3 「文教みまた」の基本的な行動様式の作成

調査結果から明らかになった課題1「望ましいあいさつや清掃の仕方についてのゴールイメージの共有化」に対する取組として指導用資料を作成した（資料2）。これは、共通実践5項目について、教師がより具体的に指導できるようにした指導用手引きである。正しい礼の仕方などの基本的な行動様式や、校門での一礼、黙想・座礼、無言清掃などの仕方を発達段階に応じて具体的に説明し、教師も児童生徒も同じ基準で取り組めるようにしたものである。



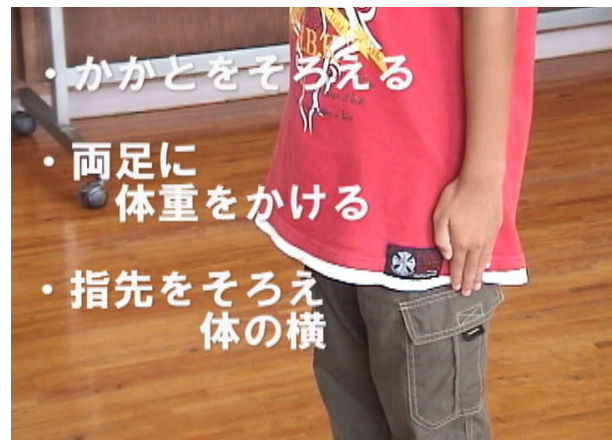
資料2

4 指導用DVDの作成

上述した「文教みまた」の基本的な行動様式の中の「あいさつ」について、児童生徒への指導用資料DVDを作成した（資料3）。具体的には、「礼の基本（資料4）」「校門での一礼（資料5）」「黙想・座礼（資料6）」について、動画をベースにして行動のポイントや文字や音声で説明した。さらに、あいさつの意義などもわかりやすく示した。それを視聴することによって、全ての児童生徒が基本的な行動様式の統一したイメージをもつことができるようにした。



資料3



資料4



資料5



資料6

5 指導法の工夫改善（ソーシャルスキル教育の授業実践）

課題2に対する取組として、「ソーシャルスキル教育の手法」を取り入れた学級活動の研究授業を小学校1学年、小学校5学年、中学校2学年で、発達の段階に応じて実施した。スペースの関係でここには3つの授業についてまとめて掲載した。

（学級活動） 気持ちのよいあいさつ

1 題材のねらい

- あいさつの仕方を身につけ、気持ちのよいあいさつを体験することで、心地よさを味わい、誰にでもいろいろなあいさつができるようにする。（小学校1学年）
- スキルの習得を通して、気持ちのよいあいさつをされる心地よさを感じさせ、誰にでも気持ちよくあいさつができるようにする。（小学校5学年）
- スキルの習得を通して、気持ちのよいあいさつを体験することで、その心地よさを味わい、進んであいさつができるようにする。（中学校2学年）

2 身につけさせたいスキル

- 相手に近づいてあいさつをする。
- 相手の目を見てあいさつをする。
- はっきりと大きな声であいさつをする。
- 笑顔であいさつをする。

3 3つの学習の約束

- はずかしがらない。
- わらわない。
- ふざけない。

4 授業の主な手だて

- ① インストラクションでは、事前アンケートやビデオ映像、心のノートの活用を図り、あいさつに関する実態や1日の生活場面でのあいさつについて把握させる。本時のめあてを知らせて、学習する上での3つの約束を確かめさせる。
- ② モデリングでは、学級担任ともう一人との教師とで「あいさつの悪い例」と「あいさつのよい例」の役割演技を行い、気持ちのよいあいさつのポイントを具体的な行動レベルで考えさせる。
- ③ リハーサルでは、発達段階に応じて、小学校1年生ではペア、小学校5年生・中学校2年生では4～5人の小グループで行わせる。
- ④ フィードバックでは、「振り返りカード」を利用して、児童生徒にリハーサルの段階の練習を振り返らせ、全体でよかった点について発表させる。気持ちのよいあいさつができた児童生徒を取り上げたり称賛したりしながら、児童生徒が日常で実践しようとする意欲の向上を図る。

5 学習過程

- 1 あいさつに関する学級のアンケート結果を見て課題に気づかせる。（インストラクション）

- 2 本時のめあてを確認する。（インストラクション）

- 誰にでも気持ちのよいあいさつができるようになるう。

- 3 あいさつのよい例と悪い例を見て、気持ちのよいあいさつのポイントについて話し合う。（モデリング）



- 4 グループに分かれて、いろいろな場面でのあいさつの練習をする。（リハーサル）

- 5 本時の学習を振り返る。（フィードバック）

- 6 日常生活での実践への意欲づけを図る。（定着・日常化）



6 授業の考察

- リハーサルの最後で「参観されている先生たちへのあいさつ」は、とてもよい実践化への場面となった。
- モデリングによる対比が効果的で、ポイントも出やすかった。あいさつをした人とあいさつをされた人の気持ちもお互いに聞くことでとらえることができた。
- リハーサルで、「前日に休んでいた友だちへ」の場面設定は、相手を気遣う言葉が出やすく効果的であった。場面もだんだん難しい場面へと設定されていてよかった。
- リハーサルの場面が、家と集団下校だったので、学校場面を入れた方がいいのではないか。
- リハーサルの場面は、児童が日頃あいさつするのが難しい場面やいろいろな人や状況でのあいさつを設定し、場面に応じたあいさつができるように練習させるといいのではないか。
- 導入が工夫してあるので、さらにあいさつの難しさやよさ、必要性など、「気持ちのよいあいさつ」に結びつくような工夫につなげたい。

6 本年度の取組についての実態把握（第2回アンケート調査）

本年度の小中一貫教育の取組についての現状を把握し、その成果と課題を明確にするために、12月に2回目の実態調査を行った。

（1）調査の概要

2回目の調査では、本年度の取組によって児童生徒と教職員の意識がどのように変化したかを把握するために、1回目と同じ質問項目で調査を行うことにした。

（2）調査の結果と考察

① 共通実践項目についての評価の変化

本年度の取組によって、児童生徒と教職員の共通実践項目に関する意識がどのように変化したかを把握するために、6月に実施した第1回目の調査と今回の調査の結果を並べて比較してみることにした。

図1 児童生徒の結果の比較（学校で先生にあいさつをしているか）

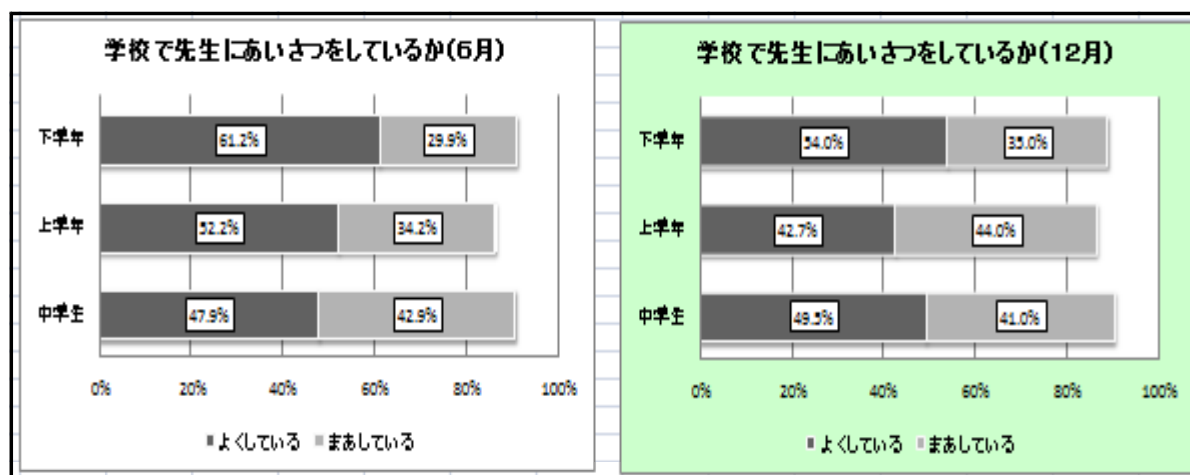


図2 教職員の結果の比較（児童生徒は学校で先生にあいさつをしているか）

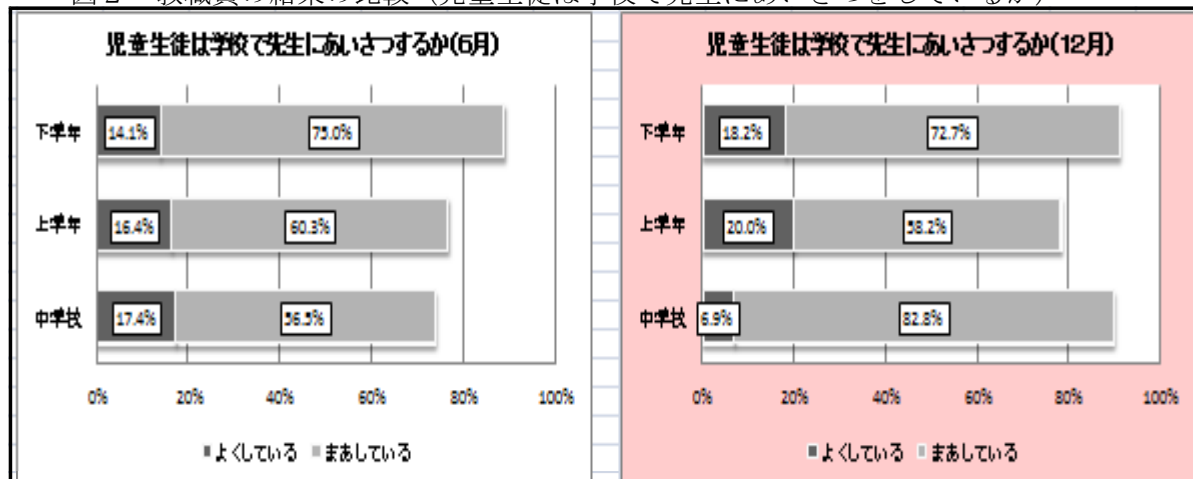


図1を見ると、「学校で先生にあいさつをしているか」との問いに対する児童生徒の自己評価は、1回目よりも2回目のほうがやや低くなっている。これに対して、教師による児童

生徒の取組に対する評価は、1回目よりも2回目のほうが高くなっている。つまり、教師から見て、児童生徒は1学期よりも2学期の方がよくあいさつをするようになっているのだが、児童生徒による自己評価は厳しくなっている。「あいさつ」や「清掃」に関する他の共通実践項目の調査結果をみても同じような傾向がうかがえる。

この結果から、1回目（6月）の結果から課題として取りあげた「望ましいあいさつや清掃についての児童生徒と教職員の意識のズレ」が縮まりつつあるのではないか、ということが推察できる。そこで、2回の調査における児童生徒と教職員の回答の差を比較してみた。

図3 児童生徒と教職員の意識の差の変化（平均得点）

質問項目	1回目			2回目		
	児童生徒	教職員	差	児童生徒	教職員	差
あいさつを大切にしているか	3.79	2.68	1.11	3.77	2.78	0.99
心をこめてあいさつをしているか	3.29	2.48	0.82	3.24	2.54	0.70
先生にあいさつするか	3.41	2.96	0.45	3.36	3.02	0.34
友達にあいさつするか	3.16	2.48	0.68	3.13	2.50	0.63
校門で一礼するか	3.29	3.00	0.29	3.19	3.01	0.18
清掃を大切にしているか	3.31	2.61	0.70	3.69	2.77	0.92
清掃の仕方がわかっているか	3.67	2.64	1.03	3.68	2.85	0.83
さっさと清掃に取り組んでいるか	3.41	2.99	0.41	3.36	3.13	0.23
静かに清掃に取り組んでいるか	2.99	2.73	0.27	3.00	2.88	0.12
すみずみまで清掃に取り組んでいるか	3.32	2.46	0.87	3.32	2.61	0.71
精いっぱい清掃に取り組んでいるか	3.37	2.71	0.66	3.36	2.83	0.53
そろえて後片付けをしているか	3.53	2.68	0.85	3.55	2.85	0.70

※ 数字はそれぞれの質問項目に対する全回答者の平均得点

※ 平均得点とは、各設問の回答に、望ましい順に4～1の得点を付け、全回答の平均を求めたものである。有意差についても検定を行った。

この結果を見ると、ほぼ全ての項目で、児童生徒の自己評価と教職員による評価の差が縮まっていることが分かる。

「あいさつ」や「清掃」の仕方について、様々な資料を活用して具体的な指導を行った結果、児童生徒の自己評価力が高まり、自分たちの現状をより厳しく評価することができるようになってきたと言える。

② 指導法の工夫・改善の効果について

児童生徒に望ましいあいさつの仕方を身に付けさせる具体的な指導方法として、本年度はソーシャルスキル教育の手法を取り入れた授業（以下、SSE授業）に取り組んだ。この実践の効果を検証するために、SSE授業を実践した学級のあいさつに関する調査結果と全体の結果とを比較した。

図4 全体とソーシャルスキル教育の授業実施学級の児童生徒の比較(平均得点)

質問項目	全体	実施学級
あいさつを大切にしているか	3.77	3.85
心をこめてあいさつをしているか	3.24	3.28
先生にあいさつをするか	3.36	3.39
友達にあいさつをするか	3.13	3.11
校門で一礼をするか	3.19	3.79
時と場に応じたあいさつをするか	3.43	3.40
家族にあいさつをするか	3.53	3.62

この結果を見ると、多くの項目で実施学級の児童生徒の結果が全体の結果を上回っており統計的にも有意な結果が出た。1回のSSE授業だけによる効果とは断定できないが、あいさつ等のスキルを身に付けさせるためにSSE授業を取り入れることは児童生徒の意識や実践力を高めていく上で大きな意義があると考えられる。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- 共通実践5項目を設定したことで三股の特性を生かした小中一貫教育が明確になった。
- 「文教みまた」の基本的な行動様式やQ & A、DVDなどの資料によって、望ましいゴールイメージが明確になり各学校で共通した指導が図られた。
- ソーシャルスキル教育の手法を取り入れた授業はあいさつ指導の有効な手段の一つであることが分かった。
- 「みまたの日」の設定で学校と家庭・地域社会と連携した取組が浸透してきた。

2 課題

- 共通実践5項目が「文教みまた」の伝統教育として定着すること(学校経営等)
- 共通実践5項目が児童生徒の達成感や誇りとなること(児童生徒の学校間交流等)
- 共通実践5項目が家庭・地域社会に波及すること(公民館等)
- 共通実践5項目の指導資料の活用・保管(手引き、DVD等)

参考文献等

・ 実践！ソーシャルスキル教育(小学校)	佐藤正二・相川充 編	図書文化
・ 実践！ソーシャルスキル教育(中学校)	佐藤正二・相川充 編	図書文化
・ 三股町史 改訂版	三股町史編集委員会 編	三股町
・ 永平寺中学校の伝統教育	永平寺中学校視察、資料の提供、NHK等	

研究同人

所 長 田中 久光(教育長)	次 長 野元 祥一(教育課長)
事 務 出水 真弓(学校教育係)	指導員 黒木 敏行(研究指導員)
研究員 黒木 賢一(三股町立三股小学校)	研究員 吉村 貴樹(三股町立三股小学校)
研究員 湯地 豊和(三股町立勝岡小学校)	研究員 行田真由美(三股町立梶山小学校)
研究員 丸山 広(三股町立宮村小学校)	研究員 馬場 智(三股町立長田小学校)
研究員 古賀 正洋(三股町立三股西小学校)	研究員 押方由美子(三股町立三股西小学校)
研究員 田口 道士(三股町立三股中学校)	研究員 倉田 和也(三股町立三股中学校)